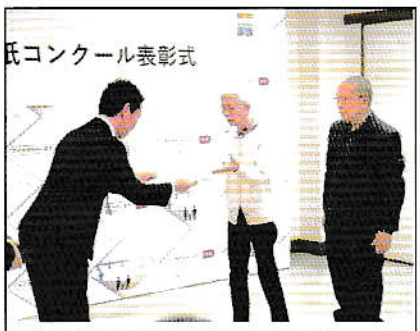
枚方市機関紙コンクール「宿場町ひらかた」が優秀賞を受賞

本会の機関紙「宿場町ひらかた（本紙）」が令和６年度の「枚方市機関紙コンクール」のＰＴＡ・サークル部門の優秀賞に選ばれました。このコンクールは枚方市が平成２年度から開催していますが、本会が応募したのは今回が初めてです。応募には本紙の「宿場町ひらかた」97号・98号を出品しました。

表彰式は令和７年２月20日、市役所第三分館（旧市民会館）であり、本会を始め受賞６団体が出席しました。各団体には表彰状と楯が授与され、本会は村次副会長、石川広報委員長、堀家広報委員が受領しました。



右から堀家広報委員、村次副会長

表彰式のあと、審査委員長（元毎日新聞社論説委員）である梶川伸氏の「機関紙づくりの基礎」と題するミニ講座があり、受講しました。

御宿場印帳の発行へ

宿場町枚方をより親しんでもらいたいとの思いから、東海道五十七次御宿場印帳が発行されることになりました。すでに発行している宿場もあり、「枚方宿（左図が御宿場印）」では枚方信用金庫が中心に計画、本会も協賛することになりました。

宿場町ひらかた

第９９号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　上谷　勝己
枚方市船橋本町2-87-7
072-857-2995
編　集　広報委員会

主な内容

○機関紙コンクール　優秀賞を受賞　（１頁）
○新居宿大会に参加　（２頁～５頁）
○長尾の史跡を歩く　（６頁～８頁）
○農兵・郷士ら幕末維新で苦闘　（９頁～12頁）

東海道シンポジウム 新居宿大会に参加

山之上西町　西平 則子

令和６年（２０２４年）11月９日と10日の２日間にわたり、東海道シンポジウム新居宿大会が静岡県湖西市新居町で開催されました。

川崎宿、土山宿、庄野宿、戸塚宿など、およそ20団体から１４０人が参加しました。

新居宿の概要

新居町は平成22年（２０１０年）に静岡県湖西市に編入されました。地域には、昭和30年（１９５５年）に国の特別史跡に指定された新居関所（正式名称・今切関所）跡など、多くの史跡があります。

新居宿（あらいしゅく／旧名「荒井宿」）は東海道の起点、江戸日本橋から31番目の宿場です。明応７年（１４９８年）に起きた明応地震と津波により、浜名湖を海と隔てていた砂堤が決壊、外海とつながり、壊滅した橋本宿の住民が今切・新居地区（荒井）に移転したのが始まりです。この地域は、中世から江戸時代にかけ、何度も地震・津波の被害に遭っています。

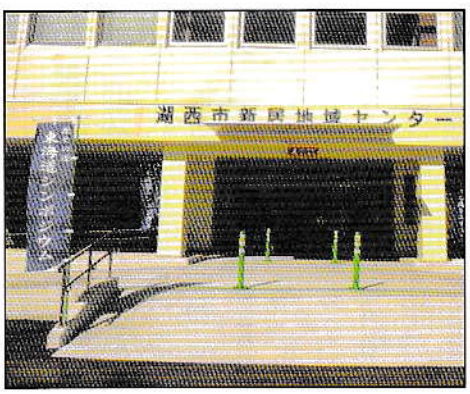
新居関所は新居宿に隣接し、浜名湖口に面していました。

徳川家康が新居から約６km離れた対岸の舞坂との間を結んでいた「今切の渡し」を利用して設置し、以来約２６０年間、江戸幕府は「入り鉄砲と出女」を水際で厳しく取り締まりました。

地震や津波により、宝永５年（１７０８年）に現在地に移転しました。

シンポジウム

会場は湖西市新居町にある地域センターです。



開会式では、開催地に受け継がれている「旅路の像」が前回の川崎宿から今回の新居宿に引き継がれました。その後、理事長や来賓の挨拶があり、前述の歴史的背景をベー

スにした講演が２部構成でありました。

第１部　基調講演

講師は元新居関所史料館長の切池融氏で、演題は「江戸時代の旅と関所　旅人はどのようにして関所を超えたか」です。

江戸時代に旅が盛んになった背景や、旅の時期や期間、ルートや経由地、費用、江戸時代の関所などについて述べられました。

弘化２年（１８４５年）に旅した武州荏原郡の名主は、５両３朱ほどの費用で、正月22日に出発。東海道から途中の寺社・伊勢・高野山・金毘羅・宮島などに赴き、中山道を経由して善光寺を参詣し、87日間をかけて帰国したとのことです。

旅に出る人の50％以上が１月に、およそ60％が２カ月から３カ月をかけて農閑期を中心に伊勢や奈良、京都、大坂などへ旅しています。

江戸時代に旅が盛んになった背景として、宿駅や街道が整備されたこと、農民の暮らしの向上、伊勢御師や代参講の発達、名所図会などの刊行物により旅への関心が高まったことがあげられています。

幕末の志士 清河八郎は、安政２年（１８５５年）、３月から９月にかけて、母親を連れて、善光寺・名古屋・伊勢・奈良・京都・大坂・金毘羅・宮島・岩国・天橋立・鎌倉・江戸・日光を巡る旅に出て、その著書「西遊草」に、新井（※）は昨年の津波で土堤も切れ、番所もつぶれ、舟の往来甚だ難渋。本坂通に来たものの気賀の関所も女中を容易に通さないと聞いて、三ヶ日から呉松まで浜名湖を舟で渡ったと記しています。

母親は通行手形を持っておらず、つまり「関所破りをしていた」ということです。

見附宿から御油宿の間は、新居関所を通る東海道の他、古くは東海道の本道であった浜名湖の北側の本坂峠を経由する本坂通があり、津波などの被害が出た時は本坂通が使われましたが、土地のひとにお金を払って浜名湖を舟で渡り、「かくれ道」を行く旅人もかなりいたようです。

江戸時代の後期は、通行手形も、原則として武士の場合は領主、庶民の場合は在住地の名主などが発行していましたが、旅の途中で旅籠が発行することも多かったようです。お蔭参りなどの旅をする女性も多くいた様子。

当時の人々の行動範囲の広さ、逞しさを感じずにはいられません。

※新居は、荒井、新井などと表記されることもあります。

第２部　講演

講師は湖西市新居・中根庭園を研究する会　会長　吉元洋美氏で、演題は「中根金作と新居　中根金作が作った庭の紹介と解説」です。

「昭和の小堀遠州」といわれた中根金作（１９１７年～１９９５年）は、静岡県遠州磐田の出身で、大阪芸術大学の学長も歴任し、島根県の足立美術館庭園などで知られる造園家です。庭園研究家でもあった中根金作は、現在の湖西市と合併する前の旧新居町時代に、東海道の交通の要衝で、今も唯一現存する関所跡を活かしたまちづくり、浜名湖と遠州灘の両方に接する地の利を活かした町に暮らす人と訪れる人の両方を考えた緑豊かな公園緑地設計と歴史景観まちづくりをしました。

この講演では、中根金作の功績を中心に、美意識と景観の視点、町並みの歴史と変遷、中根金作の景観まちづくり、自然に倣ったまちづくりと日本庭園について、数々の庭園などの画像を紹介しながら解説されました。

宝永５年（１７０８年）にまちが現在の地へ移転した折に、幕府直轄から管理を引き継いだ吉田藩の作事奉行 土肥孫兵衛豊隆が寺社を山麓に配し取り入れた碁盤目の町並みが今も守られ、町の歴史や特徴的な地形を知ることができるように工夫されている、とのことでした。

講演終了後、次の開催地戸塚宿に「宿場旗」の受け渡しが行われ、閉会となりました。

まち歩きツアー

２日目、40人ほどが５班に分かれ、新居古里ガイドの会のみなさんの案内で、中根金作が手掛けた枯山水庭園がある老人福祉センターを９時30分に出発し、新居宿の町並みや史跡を見学しました。

案内板

旧東海道で、「橋本」と書かれた案内板が目に入りました。前述しましたが、平安から中世まで浜名川沿いの浜名橋周辺で繁栄し、明応地震と津波で水没した新居宿の前身です。

「魔除け」として玄関に置かれている使用済手筒花火

「魔除け」として、民家の玄関に使用済手筒花火が置かれていました。

新居町の手筒花火は、江戸時代から３００年以上も続く伝統行事で、約２千本もの花火が諏訪神社に奉納されるそうです。

土塁が突き出ていて桝形になっている棒鼻、左（東）にエノキ、右（西）に松が植えてあった一里塚跡、長久手の戦いで討ち死にした戦国武将池田恒興の首塚を祀っていた池田神社を通過して寺道に入ると、町指定の天然記念物のケヤキがそびえる龍谷寺、関所稲荷大明神の神宮寺、隣海院などがまとめて配されていました。

町なかに戻り、飯田武兵衛本陣跡を経て新居関所の大御門の西側の桝形（広場）・高札場に着きました。

大御門は高さ５．８ｍ、幅４．６ｍの高麗門で、明け六つから暮れ六つまで開けられ

ていました。現在の大御門は9年前に復元されたものです。

大御門を通ると、左手に2人の改め女（別名 改め婆）とその家族の2軒分の「女改之長屋」があります。2020年に1億2千万円をかけて、竹釘を使用して復元されたそうです。

長屋で、髪を解かせて髪型や、男性の振りをして関所を通過する女性をチェックしていました。

中央には、関所改めの中心となる「面番所」があります。背後には、書院や役人が休憩する勝手や台所があります。

渡船場・護岸には波除けのための杭が打ち込まれていました。江戸時代には新居と対岸の舞坂を結ぶ今切の渡しがあり、渡船場の長さが74ｍもありました。現在は国道より南側は住宅地となっています。

関所は明治2年（1869年）に廃止、破壊されることになっていましたが、新居関所は破壊を逃れ、小学校や役場として使用されていました。

関所跡を出た後は、明治12年創業の銭湯『みどり湯』や船囲い場跡、灯籠を保護する鞘堂（さやどう）に収められた秋葉灯籠、新居町奉行所跡、新居小学校前に行きました。

新居小学校は、明治6年（1873年）に新居関所の建物で創立され、大正5年（1916年）に、埋め立てのために削られた「源太山」があった現在地に移転しました。

新居町の沿革や、関所をはじめとする史跡や文化遺産に関する地域の取り組みへの認識を新たにし、伝統や文化を守り受け継いでこられたこの地の先人たちの心意気に触れることができた大会でした。

数年前までは本当に知名度が低かった「枚方宿」でしたが、11月2日～4日に放送されたブラタモリの『東海道五十七次』の効果が絶大で、いろんな方から声をかけていただき、「枚方宿」がやっと全国レベルで認知されたことを実感した大会でもありました。

新調した法被を纏って情宣活動された枚方文化観光協会やボランティアガイドの皆さん、お疲れさまでした。

新居宿をはじめ、宿駅会議のスタッフの皆さん、色々と本当に有難うございました。

長尾の史跡を歩く

三栗　石川　勲

令和６年秋の「近郊の史跡を歩く会」は11月10日、長尾駅に近い、正俊寺、菅原神社、さらに伝王仁墓などを訪ねました。午前10時に会員など19人がJR長尾駅に集合、枚方市観光ボランティアガイド３人の案内により出発しました。

正俊寺

最初に訪れたのは長尾駅の南側にある、曹洞宗の長尾山正俊寺（しょうしゅんじ）です。正俊寺は旗本久貝家の菩提寺で、久貝正世（くがいまさよ）が父の正俊（まさとし）を弔うため、慶安４年（１６５１年）に建立しました。

久貝正俊は初代大坂東町奉行、石高は５７００石、主な知行地は、枚方市内の長尾、津田、藤阪、杉、片鉾を所領していました。ただ、これらの知行地を実質的に管理し、地域の開発・発展に尽力したのは同家長尾陣屋の代官を務めた家臣の細谷善兵衛で、境内には彼の墓石もあります。

正俊寺本堂　2020年竣工

境内には同家の知行地である讃良郡中野村（現四條畷市中野本町）にある正法寺（しょうほうじ）から移した釈迦如来坐像と石造十三重塔（府有形文化財）があります。

石造十三重塔（鎌倉時代の作）

なお、正俊寺では観光目的による入山は認めていないためガイドさんは制服を脱ぎ、本会の旗も畳みました。

菅原神社

正俊寺とは道路一つ挟んだ向かい側にあります。神社名からわかるように、祭神は菅原道真です。

創建は慶安３年（１６５０

年）で、正俊寺と同様、この地域を知行地とした旗本久貝正俊の子正世が地域の氏神として、長岡京市にある長岡天神の分霊を勧請し、造営したのが始まりとされています。その後、修復と修繕を繰り返し、現在のお社は平成６年３月に竣工したものです。

菅原神社本殿

現地に設置されている枚方市の説明板によると、境内はテンダイウヤクの群生地となっています。中国原産の常緑低木で、漢方薬として、健胃、鎮痛薬として使われていたもので、３月から４月にかけて淡黄色の花を咲かせます。

テンダイウヤク
平成25年4月撮影

伝王仁墓

次に藤阪東町２丁目にある大阪府指定史跡「伝王仁墓」を訪ねました。

平成28年に枚方市教育委員会が設置した現地の説明板は次のように説明しています。

古事記によると、和邇吉師（王仁博士）は応神天皇の時に朝鮮半島の百済国から渡来し、「論語」一〇巻、「千字文」一巻をもたらしたとされる人物です。

この地には、かつて「おに（鬼）墓」と呼ばれた自然石があり、歯痛など霊験があると信じられていました。江戸時代の儒学者並河誠所は、その自然石を王仁がおにに訛ったもので本来は王仁の墓だと領主（久貝正順）に進言し、享保16年に「博士王仁之墓」の石碑が立てられました。（以下、略）」

私が昭和43年に初めてここを訪れた時、一面ただの草むらでした。それから半世紀余りたった今日、日韓両国の関係者、地元「王仁塚の環境を守る会」の皆さんのご尽力により、大変立派な史跡になっています。

特に目を引くのは平成18年住10月に完成した「百済門」です。丹青の色彩が鮮やかです。

百済門

墓域の正門で、高さ５m、幅６mあります。韓国から来日した宮大工など、多くの方々が韓国の材料資材を用いて、韓国の霊岩郡にある王仁廟をモデルに建立したもので、本格的な朝鮮様式の建造物です。なお、史跡名に「伝」が付いていますが、説明が長くなるため省略します。

旧田中家鋳物民俗資料館

枚方市藤阪天神町にあります。枚方市が、枚方上之町にあった大阪府指定有形文化財「田中家住宅　鋳物工場及び主屋」の寄贈を受け、移築・復元し、昭和59年に鋳物関係の資料館としました。

鋳物工場には、鋳物や鋳物師（いもじ）に関する資料など、主屋には農業や民具などを展示しています。

田中家は古くから鋳物業を営んでいました。江戸時代の鋳物師は公家の真継家の支配下にあり、田中家は北河内で正式に許可された唯一の鋳物師で、「河内国左右惣官鋳物師」の格式を与えられていました。庶民が使う鍋・釜や農具、寺院の梵鐘も鋳造していました。

田中家鋳造による市内で唯一現存している梵鐘（枚方市指定文化財）。渚院址は工事中ですが、鐘楼と梵鐘は残っています。（令和６年３月８日現在）

動員された農兵・郷士ら
幕末維新で苦闘

交野市天野が原町　堀家 啓男

幕末から維新にかけて、戦争に動員された農民、郷士の苦闘や幕府瓦解で枚方に領地のあった小身旗本の迷走を取り上げます。

長州征伐に農兵を動員

安政2年（1855年）5月、旗本久貝家第11代正典は、その領下の壮丁（そうてい／血気盛んな男）を長尾陣屋（長尾元町2丁目）に集め、自主的に銃、砲、刀術の訓練を行わせました。久貝領の倉治、田口、津田、藤坂、長尾の各村から農民約20人ずつが集められ、訓練は農耕の合間に月3回の割合で行われました。砲術訓練は長尾陣屋に備えた大砲2門を用い、長尾の伝王仁塚の東の丘陵地で、津田山を標的にして行われたそうです。また、鉄砲訓練は津田山の北の丘陵地で行われ、実弾も使われました。その際、使われた的（まと）が、安政4年（1867年）6月に津田の春日神社（津田元町1丁目）に絵馬として奉納され、拝殿内正面に掲額されています。

打ち抜かれた的

久貝家は大身旗本で、初代正俊（大坂東町奉行の役知を入れて3千石、後に5千石）は、神君家康の内意を受け、所領は河内国境などの街道筋に配置されました。第3代正方は幕府の期待に応えるため元禄2年（1689年）、北の備えとして長尾村に陣屋を建てます。

久貝家菩提寺（正俊寺）
長尾宮前2丁目

長尾陣屋（跡地／長尾元町2丁目）は枚方街道沿いに東西約60間、南北30余間で、御殿、代官詰所、倉、牢舎を備えていました。陣屋近くの

瑠璃光寺（長尾元町２丁目）に沿った道は、陣屋を守るよう遠見遮断の工夫がされています。

幕府の軍制改革で兵賦（へいふ／石高に応じて農民兵を徴用する制度）が導入（１８６３年）されると、訓練を積んだ農兵は久貝家の兵賦として第２次長州征伐（１８６５年）の幕府軍に組み込まれます。徒士（かち）格で武士並みとされ、苗字帯刀を許されたようです。春日神社に奉納したのは長州征伐での武運長久を祈願したのでしょうか。

慶応元年（１８６６年）５月、長尾陣屋では、総指揮の小柳鎮之助が、訓練のできている農兵のうち17人を２門の大砲方掛りに命じ、稽古を繰り返しました。翌閏５月27日には、大砲２門に兵15人、弾丸を入れた長持ち５棹に兵30人、その他の荷駄７人、合わせて52人で、大坂に出陣していた久貝家当主正毅（まさつき）の陣所に運びました。９月には「長州藩再討伐」の勅許がおり、家茂将軍は、本営を滞在中の大坂から姫路に進めることになりました。

久貝家の農兵割り当ては総数１００人。倉治村29人、津田村29人、藤坂村15人、杉村３人、長尾村12人、田口村12人、村々ではその人選で大騒ぎとなります。しかし、家茂将軍の姫路進発がないままその年が暮れ、翌慶応２年（１８６７年）、前線は、最新式の長州軍が優勢で幕軍の敗報が続々と大坂に届きます。さらに大坂城にいる将軍の健康がおもわしくなく、幕軍首脳が動揺します。７月20日、家茂将軍が病死、幕軍の戦意は落ち、戦局は膠着状態となります。９月には正毅も江戸に帰り、大坂に運んだ大砲などは、長尾陣屋に持ち帰りました。動員された農兵は姫路から帰還したとか、出陣や戦闘はなかったという話もあり、村人らは無事帰還でき大いに喜んだことでしょう。

これに類する農兵動員の話は大坂狭山や高槻など各地にあります。また旗本ら領主は、御用人足として自家の用務に村もちで農民を徴用し、さらに年貢以外に多額の御用金（借金）を度々命じ徴収しましたが、領主からの返済はほとんどなく、村や農民の泣き寝入りでした。

東征軍に加わった三松家の人々

枚方・禁野村の大垣内には平安の世、禁野（きんや）で、栄華をほこった百済王氏（朝鮮半島南西部にあった国の王族）の後裔と伝えられる三松（みつまつ）家が住んでいました。近世初頭に新田を開発して移り住み、農民となっていたのです。

禁野村の領主となった旗本船越家は、往古より由緒ある地元の名家である三松家を客分とし、郷士として処遇し、石高１４０余を扶助料の名義で旧地の支配を認めていました。

文化14年（１８１４年）、この三松家に生まれた俊明（としあき）は、学を好み、京坂の諸大家に付き、和漢の学を修めました。嘉永７年（１８５４年）正月、ペリー艦隊の再来に際しては、領主の船越景之に従って出陣しています。

その後、江戸において西洋

砲術を講じた江川太郎左衛門の門下に入り、砲術の習得に励みます。約2年、この間、勝海舟（幕臣）や大村益次郎（長州藩士）らと交わります。

安政2年（1855年）、帰国後、上方の砲術の発展に寄与します。

慶応4年（明治元年）の戊辰戦争では、有栖川宮熾仁（ありすがわのみや たるひと）大総督宮の御東征に従軍、錦旗奉行として弟俊季、長男俊忠を伴い参加し、開城なった江戸城に勤務しました。

俊忠は日記『江城陣中日鑑』を残し、彰義隊総攻撃前後の動きを詳細に記録していました。

旧暦の五月雨の頃、長雨が続き、総攻撃の日の5月15日も雨でした。日鑑には「辰上刻（午前8時頃）上野山内せめ入、表黒門ヨリ薩州打入、一略…官軍大勝利」と記しています。

雨は5月19日まで続きました。彰義隊のテレビドラマを見るとき，この総攻撃の15日が雨かどうか、考証を試すのも楽しいでしょう。

7月2日、一行は帰京の命を受け、同16日江戸城を発ち、品川沖から海路、蒸気船に乗り、同25日には大坂の天保山に着いています。（市史、第3巻）

「旧枚方市史」によれば、維新後、俊明は枚岡神社禰宜、弟俊季は慶応年間、船越家の代官を務め、御東征では宮の馬役を務めます。帰国後は、三ノ宮神社（枚方市穂谷2丁目）の神職を務めたとされています。

三松家の屋敷があったという大垣内の丘に百済王神社（大垣内町1丁目　写真は大垣内の百済王神社の参道）が鎮座しますが、この小社は百済王神社（中宮西之町）から分祀された三松家の邸内社であったそうです。

百済王神社参道

早くから大垣内の氏神として地元民に崇敬され、後に俊忠により社殿、境内地とも大垣内集落に寄付されました。

その後筆者は、禁野に三松家の墓所があることを知り、「市立ひらかた病院」の南、向かい側の道の奥、坂を下った禁野共同墓地の藪と化した雑木林に分け入り、南側斜面に大きな墓所を見つけました。墓石の一部に三松家の文字が見えましたが施錠されており入れませんでした。

小身旗本長井家の迷走

旗本長井家は大坂夏の陣で徳川に帰順し、寛永17年（1639年）に大番に列しました。知行184石は秀頼時代からのもので、大坂の陣の手柄で蔵米216俵を加増、合わせて400石の小身旗本でした。

知行所3カ所は枚方・茄子作村（相給村　長井家140石）のほかは少なく、幕末、茄子作の出郷高田に住む農民、喜右衛門（長井氏から苗字を許され中西家）がまとめ役の庄屋に任じられ、主家との連絡調整、知行所の年貢の売払

いなどを行なっていました。

慶応４年(明治元年)正月、旧幕軍が鳥羽伏見の戦いで敗北したあとの２月初め、徳川家は近畿、関西に知行所を持つ旧旗本に対し、領地へ赴いてもかまわないという通達を出します。徳川家の敗北で領地が減ることを見越し、厄介払いの目的で帰農を図ったのかもしれません。

「本領御安堵」だということで長井家の一党がこの通達を添付し、文書を上方へ送付、「引っ越したい」と喜右衛門に連絡します。返事も待たず早くも７月には一行が京都までやってきて、寺に泊まり、公家の家来に嫁いでいる茄子作村のかすかな縁者を伝手に朝廷での雇用を願い出ます。

これは実現しなかったようですが、上方へ来る口実だったかもしれません。領主だからと言って所有権はなく、土地になる米などを取得、処分できるだけですから、帰農もできず、京都で途方に暮れる一行の姿が目に浮かびます。

一行の賄は喜右衛門が引き受けたようで、白米、金子などを提供しています。喜右衛門らが旧主を切り捨てず、費用を負担しているのは不思議です。長い付き合いで絆のようなものがあったのでしょう。なお、10月23日には天皇が東京に入ることになったため、これを契機に長井の一行は再び東京に戻りました。

帰途の旅費についても喜右衛門が工面したと言われています。一行が高田まで押しかけてこなかったことでほっとしたことは確かでしょう。幕府瓦解で、領主、農民、双方に思わぬ難儀が訪れたということです。

文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありますが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

休刊のお知らせ

本紙は昭和63年1月の創刊号以来、次号（令和６年秋）で１００号となります。これを契機に本紙の発行を休刊させていただくことになりました。長期にわたりご愛読いただき感謝申し上げます。

ホームページを開設しています

本会をよりご理解、ご賛同をいただくため、
事業内容などを掲載しています。

ＨＰ　https://syukubamachi-hirakata.com

宿場町枚方を考える会　検索してね！